

---

# 迷い夜行 紅牢夢

初瀬 泉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷い夜行 紅牢夢

### 【Nコード】

N5052Z

### 【作者名】

初瀬 泉

### 【あらすじ】

この世のあとあの世の境界、三途の川の中州にある常世の町。管理者の娘ユズリと、人を探して町に迷い込んだ遊佐が出会って一ヶ月。

町に出現した辻斬りは生者死者異形の区別なく、ひたすらに血の雨を降らす。

それが遊佐の探し人なのか？ 迷い夜行完結編になります。

## 序（前書き）

迷い夜行 紅牢夢 は『迷い夜行』、『迷い夜話』の続編となります。未読ですと不明な点が多くあると思いますので出来れば前作、前前作を読了後にお読みください。

## 序

御方様はわたくしには赤が一番似合うと仰って下さいました。おかたさま

御自分も赤が最も好きな色なのだ、とよく仰っておられました。

ですからわたくしは御方様の選んで下さる、御方様の愛する赤い衣がととても好きだったので御座います。

御方様がわたくしのために特別にあつらえて下さった、真っ赤な椿ちりめんの縮緬細工の髪飾り。

わたくしの肌によく映えると、真っ赤な紅をお取り寄せ下さいました。

そして赤あかべに紅、真朱しんしゆ、緋色、猩々しょうじょうひ緋、京緋色きょうひいろ……。御方様は様々な赤の衣を仕立てて下さいました。

ですがわたくしに最も似合うのは純然たる赤だと御方様は仰いました。

赤は太古の昔より生命の色。

その色こそがわたくしに似合う、と。

お部屋には他にもたくさん赤いお道具が溢れておりました。御方様とわたくしはそこで赤というこの世で最も美しい色に囲まれ、幸せな時を過ごしたのでございます。

けれど下賤な輩は御方様の愛する赤で溢れる部屋を見ては悪趣味だと罵り、繊細な御方様を傷つけたのでございます。

お可哀そうな御方様。

ああ、どうかそんなお顔をなさらないで下さい。

貴方様にはわたくしが居ります。

貴方様の憂いを取り除くためでしたら、何でも致します。

だからどうかどうか、笑って下さいまし。？

## 終幕のための開幕 1

三途の川の中州、生と死の境界。  
そこには夜だけの町がある。

明けることのない常夜の町はあらゆる境界であるがゆえに曖昧だ。  
町は無数の橋によって幾多の此岸しがんと繋がっている。だからここには様々なモノが存在する。生者も死者も異形も当たり前に行き交う。  
ある者は死後、冥府に進むことを拒み。

ある者は生きながらに境界に迷い。

ある者は自ら選択して生死の概念すら曖昧な町に遊ぶ。

当代管理者の娘、ユズリは生きながらに町に出入りする人間だ。  
そのため四六時中この町にいるわけにもいかず、此岸の生活に謀殺され町から足が遠のくことがなくもない。だがそうしているうちに  
も町でも時は進み、時には町での生活に関わるような事件が起きて  
いることもある。

それをいち早く知るには管理者である父・シノに聞けば話は早い  
のだが、管理者というのも暇ではない。ただ町へ行けば会えるとは  
限らず、冥府に呼び出されていればそうそう呼び戻すことも出来な  
い。

そうした時、町での情報を知るのに役立つのが瓦版かわばんだ。江戸時代  
に見られた瓦版とほぼ同じもので、一枚の紙に時事性の高い最新情  
報から時には冥府からの御触れが記され、あちこちで売り歩かれる  
物。

町では最も人通りの多い大通りや、此岸との出入り口である橋の  
近辺に貼り出されたりもする。何しろ危険も多い町だ。情報は少し  
でも多い方がいいということで安価に情報を知ることが出来るため

重用されている。安価な分だけ裏通りをねぐらにする情報屋ほど詳細ではないが、わざわざ危険の増す裏通りにまで行きたくない者にとって瓦版は欠かせない情報源なのだ。

そしてユズリもその安価な情報源をよく利用する。ガセネタやゴシップまがいの記事が少なくないでもないが、冥府からの重要な御触れなどは確実に知ることが出来るので、情報屋を頼るほどでもない時はそれで十分なのだ。

さて、そのユズリは毎晩のように町にやってくる時期でも、とりあえず瓦版が売られていれば周囲の購入者達の様子を見て面白そうなら購入する。

そして今日は橋を渡って町に入っすぐ、瓦版を売り歩いている読売の周りには人だかりが出来ているのが見えた。

## 終幕のための開幕 2

「さあ冥府がついに本腰を上げた！ 既に被害者は十を超え、先日の代表者会議で代表者達に冥府からがお達しがあつたそつだ！ 何としても真赤姫まあかひめを捕縛せよ、そのための手段は問わず、場合によっては魂の滅絶をも許可すると！」

読売の声に周囲がざわめく。  
当然だ。

魂の滅絶はこの町で定められた数少ない法の中でも第一級犯罪。此岸で言うなれば殺人と同じ意味だ。

この町には生も死もない。つまり死ぬことはない。

理屈は分からないがこの町では生者も肉体ではなく死者同様、魂だけの存在となるらしい。普段は肉体の内側にある魂が町に立ち入った時だけ肉体を覆うように外側に出てくるとでも言うのだろうか。だからここではいくら肉体が傷を負つても致命傷にはならない。

町を出て此岸に戻ればいつの間にか魂は肉体の内側に戻り、ずっと内側にあつた肉体には傷一つついていないのだ。もつとも、肉体は無傷といつてもそれは表面上のもので、その内側の魂は傷ついている。外科的には全く傷がないはずの肉体が魂に呼応するように痛みはする。けれどそれは肉体的には何の問題もない。此岸で病院に行つても原因不明と言われるだろう。まさか魂が傷つけられました、治して下さいと言つても治すことのできる医師は此岸にはそうそういないだろうし、そもそも信じてくれる医師がいるとは到底思えない。

そういうわけでこの町に死はない。いくら魂が傷ついても肉体が無事ならそれは死ではないから。冥府のいう死の定義は肉体の死なのだから。

だが死はないが、終わりはある。

魂を傷つけても死にはしない。

ただし魂そのものを再生不可能なまでに傷つけることはできる。肉体に自己再生能力があるように、魂にもある程度の傷ならば自己修復する機能が存在する。ただしそれには限界がある。

魂の滅絶とは、その限界を超えるまで魂を傷つけること。自己再生も及ばない程に傷を負わせ、この世からもあの世からも境界からも消し去ること。

此岸で言う死が肉体の死を示すなら、この町で言う死は魂の死と言っているかもしれない。

魂が滅べば次はない。冥府に行つて罪を濯ぐことも、新たな生を受けるべく生まれ変わることもできない。

だからこそその重罪。

それを冥府が許可した。それは事態がそれだけ異常であることを示す。魂を殺し、冥府で裁きを受ける権利を奪い、あらゆる可能性を奪つてでも下手人を捕獲しなければならぬと判断された事態。

幼い頃からこの町に出入りするユズリですら、そんな事例を目の当たりにするのは初めてだ。

初めてお目にかかる事態にユズリは少々の興奮を覚えながら人だかりを掻き分けながら読売へと近づいて行つた。

鬚<sup>まげ</sup>を結つた読売は紙を片手に掲げ、話を続ける。

「始まりはこの町の裏通り、冥府にもほど近い暗闇で。冥府の把握する魂が七つ、一日の間に消滅した。冥府のお役人が駆け付けると辺りは血に染まり赤一色だったそう。辛うじて生き延びた二人の証言によれば、下手人は真つ赤な着物を幾重にも着た、まるでこそその姫御前<sup>せしめひ</sup>のような若い女だったとか！ しかしその右手には血に染まった刀剣が握られていたそうだ！」

辺りに恐怖と好奇の混じつた声が上がった。その中でユズリは息を飲んだ。

およそ一ヶ月前に町を訪れ、父の命令でここ最近ずっと行動を共にしていた男、遊佐<sup>あそ</sup>。人形じみた風貌の彼は、人を探してこの町まで来たと言つ。



多分、高確率で赤い打ち掛けを羽織っている。

それから柄が赤い脇差わきざしを持っている。多分抜き身だろうな。

初めて会った時に彼はそう言った。

赤い着物、赤い脇差。

それは読売の言う下手人の風体に一致する。

ユズリは気が逸るのを抑え込みながら読売の話の続きを待った。

### 終幕のための開幕 3

「しかしそれでも行方も素性も杳として知れない。冥府から派遣されたお役人と番所が総出で調査を開始したが、下手人の影も形も掴むことは出来ない。そうこうしているうちにまたこの裏通りで魂が五つ、消えた。今度は生存者もいない、目撃者もいない！ 誰ひとり生き延びることも出来ずに赤い血の海だけが残されていた！ そしてまた起きた！ 一つ魂が消え、五人が重傷を負いながらも生き延びた！ 五人の生存者兼目撃者によれば、下手人はやはり赤い着物の女だと言う！ そして冥府はその顔すら分からぬ赤い着物の女を真赤姫と呼び、第一級犯罪をたやすく犯す恐ろしき大罪人として町全体に厳戒令を発した！ 腕に自信のない者は裏通りへは近づかぬよう、自信のある者は代表者達に助力するか真赤姫の情報を集めるようにと！ さあこれが真赤姫の人相書きだ！」

そして読売は手にしていた紙を勢いよくばら撒く。

落ちた人相書きを拾う者、より詳細な情報を知る者はないのかと読売に詰め寄る者などで周囲はさらにごった返した。

小柄なユズリは人ごみに飲まれながらも何とか読売のもとまで辿りついた。

「人相書き、一部ちようだい！」

何とか人ごみを掻き分けて読売の前まで出ると、読売が驚いたような声を上げた。

「おや、ユズリお嬢さん。珍しいですね、お嬢さんがわざわざ自分からあっしの元までいらして下さるとは」

確かに、いつものユズリなら人が減るのを待ってから管理者の娘という立場を大いに活用し、瓦版が既に品切れとなっけていても強引に刷らせて自分の元まで持って来させている。

だが今回はそんな時間すら惜しい。

父の口車に乗せられ此岸の時間において早一ヶ月。いい加減何か

しら遊佐の探し人の手掛かりでも掴まねばまたからかいの種にされるに決まっているのだ。

手掛かりがあるなら一刻も早くそれを受け取り、探し人とやらを探して遊佐の前に引っ立てなければ。

「いいから、一部ちようだい。真赤姫とやらの人相書き」

肩で息をし、乱れた髪を直しながら読売に手を伸ばす。

「へい。これでさあ」

そう言っ読売が差し出してきた紙にはまるで浮世絵のように鮮やかな絵が描かれていた。

そこには赤い衣を幾重にも纏い、その手には日本刀らしき刀剣を持った女が描かれている。そして刃は決して長くない。

ユズリは人相書きを受け取り、読売を見た。

「この下手人が持っている刀剣は、目撃者の証言を元に描いたの？」

「そうらしいです。この町には色々な種類の刀剣があるでしょう？」

何でも冥府のお役人が金物屋の旦那の店へ目撃者を連れて行って、真赤姫が持っていたのに一番近い刀剣を探させたとか」

「八卦院はっけいんの店へ……」

様々な世界の武器が横行するこの町では刀剣と言われただけでは特定は難しい。だが八卦院の店なら町中のありとあらゆる武器が揃っている。そこで最も近い形の刀剣を探し、その刀剣がどの此岸の物なのかを検証するだけでも下手人の素性に繋がる可能性は高い。

「ってことは、八卦院のところへ行けばもう少し詳しくわかるかもしれないってことか」

「ユズリお嬢さんも真赤姫の捕縛に名乗りを上げるんですかい？」

シノの旦那が心配しますぜ？ あっしもこの町じゃ長いが、魂の滅絶なんてえ大罪をこんなにも多く犯した馬鹿は聞いたことはねえ。

冥府も相当危険視しているようですし、お嬢さんも今回はやめておいたほうが……」

「何よ。私じゃ他の代表者に、折継おしづくとかにまで劣るって言うの？」  
心配してくれることには感謝するが、折継の下に置かれることは

我慢ならない。

「い、いえ、そういうわけじゃ……」

読売は慌てて目を逸らし、「お嬢さんはお強いですから心配いりやせんでしたね」などと言いながら別の連中に人相書きを配り出した。

ユズリは人相書きを折り畳みながら人だかりを後にした。

まずは遊佐と落ち合うのが先決だ。件の真赤姫が本当に遊佐の探し人かどうかも現状では不確かなのだから。一人意気込んで行って別人でしたでは笑い話だ。

## 終幕のための開幕 4

遊佐も最初に町に足を踏み入れてから一日も休みなく町に通つてくる。今日がその例外となる日でなければだが。彼とは特に待ち合わせをしているわけでもないのだが、大抵彼は大通りか橋の付近の預かり所にいる。

預かり所はその名の通り、この町の物を此岸に持ち出さないために町で得た私物を次に町に戻るまで預かってくれている場所だ。冥府直轄であるため対価を求められないのもありがたい。

ユズリは町で得た玩具や武器の類、最近は不本意ながら折継からもらった太刀も預けている。同じく遊佐も火縄銃と火薬等武具類を預けている。

今日はずい瓦版に目が行ってしまったが、本来なら町に入つて一番に行くべき場所だ。何しろ預かり所に行つて武器を手にするまでは、こんなにも危険な場所を丸腰で歩かなければいけないのだからたとえ大通りと言えども、どこにどんな危険な輩がうろついているかもわからない場所なのだ。さすがのユズリも武器なくしては大きな顔をして町を歩こうなどは思えない。ましてこれから冥府も危険視するような輩を相手にしなければならぬのなら。

ユズリがいつも使用している預かり所は、いつも此岸と町とを行き来している橋の側の小さな店だ。「預」とだけ書かれた暖簾のれんを潜ると、天井まで壁一面に箆たんすが置かれているだけで他には何も無い。決して広くはない屋内に先客が一名あつた。

「遊佐」

ユズリが声をかけると先客は振り返り、ややあつてから「ああ」と無感動な声を上げた。

「もう来ていたのか」

「まあね。あ、ねえ。あんたは今日の瓦版を見た？」

「いや」

遊佐は無表情に首を横に振った。

遊佐の顔の造作は人形浄瑠璃の頭かしらのように整っている。その上彼はあまり感情を表に出す性質ではないのかあまり表情を崩さず、それが余計に人形めいた印象を与える。左耳に一つだけ開けられたピアスだけが唯一、その人形めいた印象から浮いているくらいだ。

「刀狩りの番付でも出ていたのか？ 好きだな、本当に」  
少しばかり呆れたように遊佐は言ってきた。

「違うわよ。刀狩りは確かに好きだけど。そうじゃなくてあんたにとつてももしかしたら重要な……」

「お待たせ致しました！」

ユズリの声は妙に明るい声によって遮られた。

明るい声だけははつきりと聞こえるが、その声の主の姿はどこにもない。今屋内にいるのはユズリと遊佐だけだ。

だが声ははつきりと屋内に響く。

「遊佐殿から預かりましたお荷物は改造火縄銃じやうていが一挺、火薬が二袋、弾丸が一袋。間違いはありませんか？」

「ああ、間違いない」

箆筒のほうを向いて遊佐が答えると、壁一面にある箆筒の引き出しの一つが飛び出すように開いた。中には遊佐の荷物が一式。

遊佐が確認するように一つ一つ手に取っていくのを横目に、ユズリも箆筒へと声をかける。

「私も荷物を受け取りたいんですけどお願い」

「ああ、ユズリ殿。本日はどのお荷物を必要とされますか？」

やはり箆筒から声が返ってくる。

「太刀たちを一振り。牡丹と蝶の細工の鐔つばのもの」

「承知致しました。少々お待ち下さい」

そして声が聞こえなくなる。

静かになった屋内、隣で荷物の確認を終えたらしい遊佐がぼつりと呟く。

「いい加減慣れてきたけど、何と言うか……物凄いよな。箆筒が受

付って」

「箆笥って言うんじゃないわよ。ハシキは姿こそ箆笥だけど、一応彼女も女性なんだから失礼な言い方するんじゃないわ」

預かり所の番人、ハシキはこの屋内の壁一面にある箆笥そのものだ。

さすがに姿かたちは箆笥なので自分で歩いたりはできないが自我を持ち、会話をすることもできる。そしてその性別は女らしい。

荷物を預ける時は名前を告げれば丁寧に対応し、屋内においておけばいつの間にか箆笥の何処か……ハシキの内部らしいのだが、そこに収納されている。そして受け取る時も名前と必要な荷物を言えばやはり丁寧に対応した後、いつの間にか屋内にその荷物が置かれている。

確かにユズリ自身、当初はかなり違和感のあった光景だったがハシキは町では珍しいくらい善良でよく気も効くため、他人の好き嫌いの激しいユズリも彼女には好意を持っている。

## 終幕のための開幕 5

「お待たせ致しました、ユズリ殿」

その声がすると同時、箆筒の引き出しが一つ飛び出してくる。中には豪華な造りの太刀が一振り。

「そちらの刀でお間違ひありませんか？」

ユズリは太刀を手に取ると、しげしげと上から下まで眺め、鞘から引き抜いた刀身も確認してから大きく頷いて答えた。

「うん、大丈夫。ありがとう」

「いつもご利用有り難うございます。お二人とも、お気をつけて行ってらっしゃいませ」

ハシキの明るい声を背に、ユズリは遊佐と連れ立って預かり所を後にした。

「ああ、やっぱり刀を手にすると、町を歩いてるって気になるわ」  
左手に太刀の重みを感じながら歩くと、ようやく少し気を楽にして町を歩けるようになる。

「さすがの私もね、丸腰でそこらのゴロツキ相手にしようとは思えないわけよ」

先日手にしたばかりの太刀は、ユズリが以前から目をつけていた代物だ。刃紋はもんから鐔の装飾、柄や鞘に至るまでこれ以上ないほど好みの代物だったのだ。一度は折継の手に渡ったものだが、彼の気まぐれのおかげで件の太刀はこうしてユズリのもとにやってきた。

折継のお下がりというのは気に入らないが、実際にこうして手にしてしまうとそんな些事はどうでもよい気になってくる。

「この刀はもともものすごい私好みの外観なんだけど、実際に使ってみるとこれが運命の出会いって言うんじゃないかというくらい使いやすいし」

「その結果、刀狩りの番付も上がりましたってか」

無感情な遊佐の言葉にユズリは顔をにやけさせる。



「こんなに使い勝手も装飾も好みの刀だもの！ 刀狩番付で折継のバカを下すくらいしなきゃ、この刀に失礼じゃない！」

力説すると、遊佐は少し引いたように呟いた。

「……前から思ってたはいたが、ユズリは刀マニアなのか？」

「何よ、悪い？」

「いや別に……ただ刀の話になると、いつもとノリが違うよなーと」  
「当然よ！」

刀の、特に日本刀の美しさは芸術の域だ。

少しずつ異なる刃紋の多様性、研ぎ澄まされた刃の幽玄の美、そして危ういまでの鋭さもさることながら、鐔や柄、鞘の細部にまで職人が妥協なく己の業を振るう。

「こんな芸術を前に、興奮しないわけがないじゃない！」

拳を握りしめながらそう力説すると、遊佐は「はあ………そうなのか」とつまらない返答を寄越したきり黙った。

自分から聞いてきたくせにその反応は何なんだと怒りたくなっただが、刀の話で思い出した。

「そうだ遊佐。これを見て」

「何だ？」

遊佐に差し出したのは先程読売からもらった人相書きだ。

人相書きに視線をやりながらも最初は気のない風だった遊佐の表情が少しずつ強張っていくのがわかった。

「それは今、町で魂の滅絶っていう第一級犯罪を重ねている辻斬りの人相書き。人相書きって言うよりは絵姿だけど。下手人の素性は全くの不明で、被害は恐らく町の歴史に残る規模。調査に冥府から役人も派遣されているし、代表者達にも捕縛令が下ったそうよ」

遊佐は人相書きを目にしたまま答えない。

「下手人はその赤衣着物を着ていたっていう外見くらいしか手掛かりがなくて、町では真赤姫と呼ばれている。冥府は真赤姫の捕縛に本腰を入れ出して、真赤姫の捕縛に限り、代表者達に魂の滅絶を許可したそうよ」

じつと人相書きを見ていた遊佐が顔を上げた。

その表情はやはり人形のように、何の感情も窺えない。無表情のまま、遊佐は静かに口を開いた。

「こいつだ。俺が探していたのは」

静かな、不安になるほど静かな声で遊佐は言った。

## 終幕のための開幕 6

「この絵が正しいのなら……この絵に描かれた着物や脇差や、顔立ちが間違いでないのなら、俺が探していたのはこいつに間違いない」  
「……そう」

「真赤姫、か。随分似合いの名をつけられたものだな」

もう一度人相書きに視線を落とし、呟くように遊佐は言った。

「あんたは、どうする？ 冥府が捕縛令を出した以上、もう私やお父さんの一存では真赤姫を庇うことは出来ない。捕縛され次第、冥府に連行されて裁きを受けることになると思う」

顔を上げない遊佐にそれ以上言うことは躊躇われたが、ユズリは深く深呼吸して意を決し、口を開いた。

「他の誰かが捕縛したのなら、恐らくあんたはこの先真赤姫に会うことは出来ない。捕縛した後に少しでも会いたいと言っても受け入れられることはないと思う。そして捕縛されれば、恐らく真赤姫は極刑……魂の滅絶が刑として執行されると思う」

遊佐は黙っている。長い睫毛を伏せ、本当に人形になってしまったかのように静かに。

ユズリは遊佐と真赤姫と呼ばれる彼女の関係を知らない。

ただ遊佐は探しているとだけ言って、この町に来た。ユズリもそれ以上追及しなかった。彼と迷子がどんな関係であろうと、他人であるユズリが関知すべきことではないと考えていたから。

迷子という表現上、恐らく遊佐の探す者は生死の境にある者……あるいは死者なのだと思っていた。

そういう迷子は決して少なくはない。自分が死んだことに気付かず町に迷う者、生死の境をさ迷いながら町に迷い込んだ者……ユズリもそういう迷子には今まで幾度か会ってきた。

だが迷子が辻斬りとなり、第一級犯罪などという重罪を犯すなど聞いたこともない。

「遊佐」

呼びかければ、遊佐は顔を上げユズリを見た。いつもと同じ無表情に、いつもと違う何かを滲ませて。

「……聞いてもいい？ あんたにとって真赤姫っていうのはどういう存在？」

残酷な問いかけかもしれない。

けれど聞かずに、彼らの事情を何も知らずに真赤姫を捕縛するということが、今のユズリには出来そうにない。少なからず縁あった相手がずっと探していた存在を、躊躇なく捕縛する自信がない。

「もしかして、心配してくれていたりするの？」

遊佐は少し目を丸くして、そう返してきた。

反射的にユズリは顔を背け、早口にまくし立てた。

「っ私はそんな優しい人間じゃないわよ！ ただ、この町では重罪人でもあんたは保護したいとか考えていた存在だったなら、あんたは捕縛するのに役立たないでしょ！ そうしたら私一人でやらなきゃいけないんだから、そうならそうと言っておいてっていうだけで……！」

「そういう心配ならいらない」

それは抑揚のない声だった。

遊佐を見上げると、彼はその表情を崩すことなく、声にも表情にも一片の感情を覗かせることなく言った。

深い色合いの硝子玉のような双眸がまっすぐにユズリに向けられる。

「俺はあいつを保護するために、あいつを探していたんじゃないから」

静かな声が、体温などどこにも感じられない声が告げる。

「保護するためじゃない。俺はただ、けりを付けるために探していたんだ」

人形のような顔が、感情の伴わない、無機質な声を発した。

「あいつは、俺の家族を殺した相手だから」

## 赤迷宮に惑いて 1

大通りを二人並んで歩いていた。周囲は相変わらず賑々しいが、どこか物々しい。

他に類のない重罪人、真赤姫の存在と代表者達への捕縛令という事態が、常は享樂に耽る町の住人すらも恐怖を抱かせている。

遊佐はユズリの少し後ろを歩いていた。真赤姫が遊佐の家族を殺した犯人だと告白したてから、彼はずっと黙っている。

八卦院の営む金物屋で真赤姫の持つ刀の検証が行われたらしい。ならば直接八卦院に会えばより詳しい情報が入るかもしれない。自分は今から八卦院の店に行くと言うと、遊佐は黙ったままユズリの後をついてきた。

後ろに遊佐の存在を感じながら、ユズリも黙って歩く。

遊佐とその探し人、真赤姫との間には何らかの関係があることは承知していたとはいえ、彼の口から出たその関係はあまりに残酷だった。

こんな物騒極まりない町に出入りしていても、ユズリもまた此岸では平和に暮らす一般市民に過ぎない。殺されたなどという言葉、身近で聞いたことは一度もなかった。

生まれて初めて聞いたその重い事実、ユズリはどうしていいのかわからなかった。

安易な慰めの言葉をかけるべきとは思えない。かといって、何もなかったかのように常と同じように振る舞えるほどユズリは大人じやない。一ヶ月の間ほぼ毎日行動を共にし、他人と呼ぶには近い存在となった相手の抱える事情を聞いて何も感じずにいられはしなかった。

けど遊佐とて所詮は赤の他人の、探し人が見つかるまでの付き合いだと思っていた相手に、下手な同調も同情もされたいわけではないだろう。

だからユズリに出来るのはただ黙ることだった。それ以上聞くことも、余計な言葉をかけることもやめた。少なくとも、それがユズリなりの遊佐への最大限の配慮のつもりだった。

だが気を遣おうと意識するせいから、そして遊佐はそれを鬱陶しいと感じているのか、二人の間の空気は重い。あんな話の後だから軽い空気でもそれはそれで嫌だが、普段はそれなりに気の置けない相手との間にこうした空気が漂うというのも辛い。

背後で黙ったままの遊佐の存在を感じながら、ユズリは何とかこの空気を変えてくれるものはないかと周囲に気を配っていた。

しかし町も今は真赤姫の話題がほとんどだ。聞こえてくる噂もどこそこの誰が被害に遭ったとか、過去に同様の罪人がいたがここまで大規模ではなかったとか、武闘派の代表者の幾人かは既に真赤姫を捕縛すべく動いているとか。

ここまで騒ぎが大きくなると、ただ大通りを歩くだけでも少なからず情報が入ってくるのは助かる。

そう思っていた矢先、禿げ頭に一つ目の大男と異様に長い首をもつ女の会話が耳に入ってきた。

「そう言えば先刻、管理者が金物屋へ入って行ったぞ」

「金物屋つてえと八卦院の店に？ 例の辻斬りの得物の検証のこと  
でかねえ」

「そうだろうな。噂じゃ管理者の此岸の刀かもしれないらしいから、自分の目で確かめようってんじゃないか」

今日は見かけないと思っていたら、父はユズリの目的地に既にいるらしい。

丁度いい。父に会って管理者としての見解と冥府の動向を聞いてみるとしよう。恐らく向こうももう気付いているだろうが、真赤姫は遊佐の探し人の可能性が高いとも伝えなければ。

そして着いた八卦院の店は、「金物」と書かれた暖簾のれんの上に「本日休業」との札がかかっていた。

## 赤迷宮に惑いて 2

ユズリが札に構わず暖簾の後ろの引き戸に手をかけると、遊佐がやつと口を開いた。

「休業つて書いてあるのにいいのか？」

常と変らない抑揚の薄い声。少なくともユズリには特に変化は感じられない調子で遊佐は聞いてきた。

やはり気にしすぎだったのか、それとも遊佐も気を遣ってくれているのかはわからないが、ようやく二人の間にあつた重い空気が幾分軽くなつた気がした。

ユズリは引き戸に手をかけたまま遊佐に振り返つて答えた。

「お父さんが来ているから休業にしているだけよ。さっきそついう噂が聞こえてきたの。多分、お父さんも真赤姫の持っていたつていう刃物について八卦院の意見を聞きに来たんだと思う」

「ああ、管理者が」

「あんなおっさんでも一応冥府の役人だからね。ましてや正体不明の辻斬りの持っている得物が自分の此岸の物だつて言うなら、自分の目で確かめないといけないでしょ。さ、行くわよ」

ユズリは勢いよく引き戸を引くと、中には大きさも用途も様々なありとあらゆる金物が置かれた店内が広がる。だがあるのは金物ばかりで誰もいない。仕方なくユズリは奥へと進み出した。遊佐も黙つてその後をついてくる。

やがて店と奥の座敷とを隔てる障子の前に、紳士物の革靴が並べられているのが目に入った。ユズリは革靴の前で立ち止り、障子の向こうへと声を張り上げた。

「八卦院、お父さん！ いる？」

その声に応えるように、障子が少し開いた。

そこから覗いたのは雪のような白髪に黄金色の瞳の十歳ほどの少年。町での名を八卦院という、この金物屋の店主だ。

「ユズリか。それに鉄砲打ちの小僧も」

八卦院はユズリ達の姿を目にすると、障子の奥に向かって声をかけた。

「おい、シノ。お前の娘とその連れが来たぞ」

するとさらに障子が開き、人の好さそうな顔立ちの四十ほどの男が顔を出した。

「何だ、ユズリ。遊佐君まで。どうかしたのかい？」

この常に柔和な笑顔を浮かべる男こそ、冥府から町の管理を任せられている管理者だ。町での名をシノといい既に故人ではあるものの、ユズリの実父でもある。

「どうしたも何も。私達も真赤姫の情報を貰いに来たのよ」

「何だ。ユズリも真赤姫捕縛に乗り出すのかい？ あれなら折継君や六条が張り切っていたからお前の出番はないかもしれないよ」

「なっ！ あの二人相手ならますます負けられないじゃない！ ……

…ってそれよりも！ お父さん、その真赤姫のことで話があるんだけど」

「ああ、だったらユズリはそこで少し待っていていなさい」

シノはにこりと笑ってユズリの後ろに立つ遊佐へと視線を向けた。

「遊佐君。ちよつと話があるんだがいいかい？」

遊佐は少し黙ってから頷いた。

「はい」

「では少し外へ出ようか」

シノは座敷から出てきて革靴を履いた。

「ちよつと待ってよ。私はここで待っているってどういうこと？」

抗議の声を上げるとシノは無言を言わさぬ迫力のある笑顔を見せた。

「お父さんは遊佐君と大事な話があるんだよ。だからユズリはそこで待っていていなさい。話なら後で聞くから」

「だから何で私だけ除け者なのって聞いているの！ こっちは遊佐のことで大事な話があるんだから！ 私に遊佐のことを任せ



のはお父さんでしょ！？ 遊佐、あんたも何か言いなさいよ！」

納得いかずに声を荒げても、シノはユズリのことなどまるで無い物のように遊佐と共に金物屋を出て行った。

「っ何なのよ！ このクソオヤジに能面野郎！」

苛立ち任せに戸の向こうに怒鳴りつけたユズリに、八卦院は呆れたように声をかけてきた。

「落ち着けて。シノの奴にも都合があるんだろ？ そう苛々するなよ。ほら、茶でも淹れてやるから上がっていけ」

そう言つて障子の向こうから手招きしてくる。

「……わかつたわよ」

ここへ来たのは八卦院と話をすることも目的の一つだったのだ。

余計な茶々を入れてくるシノがいない分、むしろじっくりと話をできるかもしれないと思い、ユズリは靴を脱いで座敷へと上がった。

### 赤迷宮に惑いて 3

奥の座敷に通されたユズリの前に、緑茶の注がれた茶碗が置かれる。

「まあ飲め」

「ありがとう」

ゆっくりお茶を飲む気分ではなかったが、せつかく淹れてくれたものだからと口をつけると程良い熱さとほんのりと甘い香りに苛立つていた気持ちが和んだ。

そうすると怒りで一杯だった頭も少し冷静さを取り戻してくる。

「あのさ。私、八卦院に聞きたいことがあるんだけど」

「あ？ 何だよ」

ユズリの向かいであぐらをかいていた八卦院が顔を上げる。

「例の真赤姫のことなんだけど、持っていた刀が日本刀だったって本当？」

真赤姫、という単語が出た瞬間、八卦院は露骨に嫌そうに顔をしかめた。

「そっぴゃさもさつきもシノに真赤姫がどうのとか言っていたな。ったく、瓦版が出てから何人目だよ。真赤姫の情報をくわかって奴がもう五人は来たぜ」

「だって八卦院がその刀の素性を検証したんでしょ？ 現段階で一番情報を握っていきそうなのは八卦院なんだからそれは仕方ないじゃない」

「そりゃそうだけだな。どいつもこいつも、品物を買っていくわけでもなく揃いも揃って真赤姫、真赤姫って。うちは情報屋じゃないんだぞ」

「別にいいじゃない。ああ、ついでだし情報屋も兼業で始めたら？」

「この金物屋で十分儲けがあるからそんな面倒事は御免被る」

面倒臭そうに八卦院は顔の前で手を振った。



「明治後半から昭和初期？ 随分新しいわね」

古式ゆかしい衣装の辻斬りの得物というから、てつきり古い時代の曰くある品ではないかと勝手に思い込んでいたのだが既に武士もいない、近代と言っていい時代のものだとは想像もしなかった。

「シノもそう言っていた。六条がこの町に来た頃が含まれるくらいだから、俺にしたらつい最近だ。今の区分では江戸時代半ばまでの作で新刀って呼ばれるんだろう？ それに比べたら新しすぎるくらいだな」

## 赤迷宮に惑いて 4

「だね。でも何だか変な感じ。遊佐が言うには、真赤姫は打ち掛けを羽織っているらしいのよ。人相書きで見た限りもそんな感じの着物を着ていたし、髪も日本髪みたいだし、随分古風な格好なのよね」  
「そうなのか？」

現代事情には疎い八卦院は意外そうだ。

「この町ではそうでもないかもしれないけど私だってほら、この町に日本髪を結ってきたことはないし、着物を着ていたこともほとんどないでしょ？ 此岸では今も着物を着る女性はけっこういるけれど、打ち掛けまで羽織る人はあまりいないわよ。何しろ打ち掛けは裾を引きずるから、現代の生活様式を考えたら難しいのよ。せいぜい結婚式か写真撮影くらいで、普段着る人はほとんどいないと思う」  
打ち掛けは身分の高い女性の着物だったから、あまり外に出ることのない当時の女性が来ている分には問題なかっただろうが現代ではそうはいかない。昔の身分ある女性のように身の回りの雑事を全て人に任せることは難しく、全く屋外に出ないという人も少数だろう。

「俺は結婚式やら写真撮影やらするのはあまり知らないんだが、とにかく日常的ではないってことか？」

「うん、普段は洋服派が圧倒的に多い。たまに着ている人もいるけど、それでも裾を引きずっている人は見たことがないわよ」

「けどその真赤姫ってのは打ち掛けなんだろ？ どこぞの姫さんみたいな風体だって。風体も得物も間違いなく俺達と同郷なんだとは思うが、小僧が探している相手だって言うなら時代が合わなくないか？ 風体もさることながら、そもそも今此岸では刀を持つことは禁じられているんだよね？」

「うん。銃刀法違反になるから。鑑賞用とかで許可を申請することもできるけど」

「だったらおかしくないか？ 何で現代の此岸にいた小僧が、そんな古い時代の風体で、尚且つ所持出来ない刀を持つているような奴を探してるんだ？ 本来なら真赤姫みたいな奴なんて此岸にいないんじゃないのか？」

「古い服装のことは知らないけど……」

遊佐が真赤姫を探す理由について話していいものだろうか。

家族を殺された、そんなことを軽々しく他人のユズリが人に話してもいいものなのか。

言葉に困っていると、八卦院は独りごちるように呟いた。

「でもその真赤姫が死人っていう可能性もあるか。たまにいるしな、死んでからもふらふら此岸と町との間を行き来する奴」

「ああ、そう言えばいるね」

死んだ後も、彼岸に渡らずこの三途の川の中州の町に留まり、尚且つ時折思い出したように此岸に戻る者はいる。けれど此岸では既に肉体がないため、魂だけの存在でうろつくことになり、それが幽霊譚として語られたりする。

原則として死んだ者は此岸へ戻ることは出来ないということになっているのだが、何しろ町と此岸とを結ぶ橋の番人は日によって違う。見ているだけで番人としての役目を果たす気がない輩も、賄賂を渡されればそれだけで見て見ぬふりをするような輩もいる。

そんないい加減な番人だった日には、たとえ死人でも橋を渡って此岸へ戻ることは難しくはない。

「じゃあ遊佐の探し人は既に死んでいるってこと？」

死者が此岸に戻り、生者を殺すケースだって過去に数度くらいはあった。いわゆる祟り殺すだとか呪い殺すだとか、そういう話だ。

だが死者が刀を持って生者を殺すなんて話はまだ聞いたことがない。そもそも魂だけの存在になった死者が此岸に存在する何かと接触することが出来る事態、稀だという。

「いや死人ってことはないか」

再び帳面に目を落としながら八卦院が言う。

「冥府の役人が出張って来たんだ。冥府ではどの世界の死者も全て把握している。真赤姫が死者だったならもつと早く身元が割れていくはずだ。全く正体不明だからこそ俺達にまで話が下りてきたんだしな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5052z/>

---

迷い夜行 紅牢夢

2012年1月13日02時46分発行